

28. 実感的な分かり方

「分かる」ということは、「はっきりしなかったものが、理解できるようになる」ことを意味します。でも、それは時が経てば、記憶がおぼろげになり、やがて忘れることがあります。しかし、「直接体験」を通して「分かった」ことは、自分の五感を通して「実感」していますから、記憶に深く刻み込まれることが多いようです。これは、生活科や総合的な学習に限らず、教科の学習においても言えることで、如何に「体験」が大切なかを物語っています。

実感的な分かり方とは

教師側が教材を用意し、立てた計画に従って学習を進めていくやり方では、ともすると「やらされている」学習に終始し、学習者が本当の意味で「分かった」ことにならない場合がある。

これに対し、身近な環境へ主体的に、五感を通してかかわることを重視する生活科では、環境と相互にかかわり合うことによって生まれてくる「実感」をもとにして、「体験の世界」を拡げていくことを大切にする。子供たちは、この「体験の世界」を通してものごとを見たり、感じたり、考えたりする。したがって、子供の生活そのものを支えるのが、「実感を伴った、体験の世界」なのである。

体験の世界を拡げて、自分の生活を切り拓いていく子供の姿を見るとき、まさに『実感を伴った』気付きがそこにあり、自立へ向かう生きたたくましさをも感じ取ることができるのである。

実践から

アサガオや枝豆など、植物を育てる活動を考えてみます。種の植え方などに関する情報を、友だちや教師から聞いても、自分の鉢に実際に種まきをするまで、その情報は実感を伴ってはいません。いざ、自分が種をまくときになって、その情報が生きたものとなって、子供の心に根付きます。また、成長の過程で、友だちが困ったことを発表しても、「何とかしてあげなきゃ」と心情面で揺り動かされたとしても、自分ごととしては捉えられてはいません。やはり、自分の植物が同じ状況に陥った時に、「あの時言っていたのは、このことだったのか」と実感するのです。まさに自分とのかかわりの中での「体験」が大切であるということを物語っています。